

書 評

石原あえか『日本のムラージュ 近代医学と模型技術： 皮膚病・キノコ・寄生虫』

(写真・大西成明、青弓社、2018)

鈴木晃仁 (慶應義塾大学)

石原あえか『日本のムラージュ』は、20世紀前半のムラージュを取り上げて丹念に検討した優れた著作である。副題の「日本の近代医学と模型技術」が示唆するように、近代日本の医学と科学と技術を取り上げている。その直接の起源となったムラージュの事件は、パリのサン＝ルイ病院の皮膚科医ライル (Carles Lailier, 1828-98) が、果物の紙粘土細工師として名高いジュール・バレッタ (1834-1923) に声をかけて、1889年の第一回皮膚科学梅毒国際会議に梅毒のムラージュを展示したことである。このムラージュという技術は、オーストリア、ドイツ、アメリカ、そして日本にも急速に進展した。日本においては、東京帝国大学の皮膚科泌尿器科の初代教授である土肥慶蔵 (どひけいぞう 1866-1931) が、画家である伊藤有 (いとうたもつ 1864-1934) と協力しながら日本独自のムラージュの技法が発達した基盤が作られる。土肥と伊藤が発展させ、日本各地の医学校でムラージュの利用と作成が発展したありさまが、本書の主軸となる。そして、さまざまな理由でそれが終わるのが20世紀の半ばである。この書物の主題が臨床の現場を去り、どこともわからない倉庫に置かれて木箱にほこりがたまっている状況になっていく一抹の悲しさが巧みに醸し出されている。

書物は全体で9章から構成される。第1章が東大医学部、第2章が慶應医学部、第3章が北大医学部、第4章が金沢医科大、第5章は北大と東大の理学部、第6章は九大医学部、第7章は名大医学部、第8章は北里研究所、東大医科学研究所、目黒寄生虫館、そして第9章がドイツのドレスデン大学の医学史博物館。それぞれの施設のムラージュが検討される。土肥慶蔵、秦佐八郎、太田正雄、宮島幹之助という、近代日本の医学の大家たちの関与を論じている。また、それぞれの医学教授たちがどのような経験を海外でしたかということも丁寧にリサーチされている。ことに、太田正雄と、絵本の『ぞうのババール』と、ムラージュがフランスでどのような関係があるのかはとても面白い。『ぞうのババール』を子供に読む方はぜひ読んでおくとよい。

おそらくそれよりも重要なのが、それぞれの組織における「ムラージュ師」と呼ぶ病理模型を製作する洗練された職人たちに関する詳細な記述である。伊藤有、宇野一洋、南条議雄、斉藤要三郎、新島伊三郎、長谷川堅太郎、沼田仁吉など、恥ずかしながら名前を聞いたことがなかった数多くのムラージュ師の経歴関係や作品などが論じられている。そのために日本各地とヨーロッパ各地を訪問し、すでに利用しなくなっていたムラージュを各地で調査して写真を撮影した非常にすぐれた研究書となっている。医学、それも梅毒とハンセン病を中心とする皮膚科の疾患を、

精密で着色した蠟の模型で再現することに興味がある方は、必ず読まなければならない書物である。この時期の梅毒とハンセン病の患者数は、梅毒に関しては、売買春のいちじるしい発展を深い背景として患者数は非常に多く、ハンセン病に関しては、患者の隔離に関して現在でも議論が続いているように、ムラージュの利用は重要な技術であった。

このように、本書の概要をやや早口でまとめた一つの理由は、もちろん本書が優れた内容を持つからである。しかし、それと同時に、本書が持つ大きな欠点を指摘するスペースも必要だからである。本書はドイツ語圏でのムラージュと日本におけるその技法の素晴らしい発展だけに着目しており、他の地域における〈ムラージュと呼べるもの〉の発展を見ていないという大きな欠陥がある。本書第9章の巻末において、ドイツと日本の結びつきを賛美し、イタリア、フランス、イギリスなどの発展を軽く見る態度が表現されている。石原の表現は次のようなものである。

20世紀前後から医学領域で重宝された皮膚科ムラージュの研究と維持は、現在、ドイツ語圏の独走状態である。[中略] イタリアには18世紀の皮剥ぎ標本(エコルシェ)、イギリスやフランスには19世紀の皮膚科ムラージュが存在するものの、制作年代が古く、役割や価値もややずれる。これに対して日本のムラージュは、土肥がオーストリア・ウィーンから直輸入し、ドイツ語圏と平行に、伊藤とその弟子たちの手で独自の成長を遂げ、本家をしのぐ技量にまで達した。[中略] つまり日本のムラージュは、さまざまな意味での比較研究対象として重要な意味を持つ。(本書 142ページ)

ドイツ語圏で定着し日本で発展した厳密な意味での「ムラージュ」については石原が主張する通りなのであろう。しかし、「ムラージュ」を「蠟細工」と訳しなおすと、話はまったく変わってくる。ドイツ以外の地域であるイタリア、フランス、イギリスにおける「制作年代が古い」蠟細工による人体表現のテクニクについて、「役割や価値もややずれる」という石原の評価は、明らかにイタリア語、フランス語、英語での非常に重要な蠟細工/ムラージュの利用と、現在の歴史学者・医学史学者たちによる非常に活発な研究状況を見逃している。蠟を用いて人体を表現する手法は、ことに18世紀から19世紀にかけて、イタリア、フランス、イギリスの解剖学と病理学を中心とする医学にとって非常に重要であった。優れた研究と技術が成立した一つの重要な場である。また、それらが重要だったのは、医療にとって有用であったというプラクティカルな視点で見たときだけではない。そのような身体を蠟であらわす技法は、非常に重要な政治的な事件やイデオロギーと結びつけられていた。具体的には、近代的な身体の社会的なイデオロギー、ジェンダーの側面、そしてフランス革命を頂点とする巨大な政治的な事件と密接に結びつけられていた。基本的な書籍では、1989年に刊行されて、その学術的な価値が評価されて2001年に日本語訳もされたルドミラ・ジョーダノヴァの『セクシュアル・ヴィジョン』においても、イタリアの蠟細工の議論や、ジェンダーの分析や、フランスの蠟細工の巨大な政治的なコンテキストについて非常に面白い形で議論がされている。そして、それらのヒントを発展させて、優れた研究論文や研究書が現在にいたるまで数多く出ている。ドイツのムラージュ研究が「独走状態」であるという石原の見立てに関して、私が大きな疑問符を出す理由である。

以下の書評では、他の地域と時代における蠟人形の研究を紹介したい。これは、石原の日本に

おけるムラージュ研究を否定するものではまったくない。石原の研究は、これから紹介する研究と同じくらい優れたものである。石原の研究の周囲を記述することで、より大きな国際的な地形図が将来には描かれるであろうという予測に基づいている。

まずは用語の問題から入ろう。ムラージュ *mouflage* という言葉は、英語では 19 世紀末に使われた技術用語である。Oxford English Dictionary によると、初出は 1886 年であり、医学のコンテキストで登場するのは 1902 年である。日本に関しても「ムラージュ」という言葉は、19 世紀末から 20 世紀初頭に確立した近代医学の病理的な模型技術を指している。もともとはフランス語として発展し、そしてドイツ語から英語や日本語に導入された言葉であると考えるのがよい。石原がこの用語に頼ることは、日本がムラージュという言葉から出発して、ある意味でその領域に限定するという意味で、それはきわめて正しい。しかし、その一方で、固有の歴史名辞の意味を持ち、他の地域や時代で用いられていた概念や素材とのつながりが弱くなってしまふ。英語圏の医学史研究者の現在の用語でいうと、ムラージュという言葉よりも一般的に用いられた言葉は「蠟」(wax) であり、「蠟細工」wax work や「蠟型」wax model を念頭におくのが正しいだろう。この書評でも「蠟」「蠟細工」などの言葉を用いる。

蠟という素材が古代・中世から重要なものであったことは多くの読者が知っているであろう。マリーナ・ウォーナーの優れた書物によれば、ギリシア神話から蠟はしばしば登場する。(Warner, 2006) 最も著名なものは職人のダイダロスと息子のイカロスの空中飛行とその失敗である。ダイダロスとイカロスも閉じ込められたクレタ島のラビリンス (迷宮) から脱出する物語である。背中に大きな羽根をつけるときに、それを蠟で接着させ、空に飛び立つことができた。その時の高揚感、それを神に誇るために上昇することの興奮、そして太陽への接近と高熱によって蠟が溶けはじめることの不可避、そして海に落ちて死亡する失敗と終焉。このことが明らかにすることは、蠟はギリシア文明にとって両義的な素材であったことである。自由を成功させ、同時に失敗させるものであった。自由な形をとることができることであり、もう一方で死を意味することでもあった。この両義性を用いるかのように、蠟を用いて両義的なデスマスクを作ることも古典古代から存在した。死者の顔を蠟型で取ることによって、蠟の可塑性を利用して微妙な形をとり、それぞれの個人の顔を自由に表現する可能性を持ち、一方でその個人の顔を変化しない形で永久に保存することもできた。中世の枠組みの中においても、蠟で封をする「封蠟」は個人や組織の権力の象徴であり、蠟から作られた「蠟燭」はキリスト教の儀式の重要な要素であった。評者は学術的な詳細には暗いが、蠟と両義性の重要性、すなわち自由と失墜、生と死、瞬時と永遠などの両義性については、ヨーロッパでは古代・中世と継続する長い伝統がある。

16 世紀に入るとルネッサンスの流れの中での解剖学の興隆があることも、ほとんどの読者がご存知であろう。パドヴァの医学校で解剖学を教えていたアンドレアス・ヴェザリウス (Andreas Vesalius, 1514-1564) が、『人体構造論』(1543) を刊行したこと、この解剖書は非常に大規模な解剖図譜であったこと、記述と図譜を通じて医学教育における解剖学が劇的に発展することなどは、医学史の基本である。また、解剖学の発展は狭く限定された医学だけではなく知られていた。それは絵画と描画の問題であり、宗教改革期のメッセージともつながっていた。しかし、最も重要な指摘は、人間が自己の身体の内部の構造を把握したことである。このよ

うに、人体を血液や精気などの液体性・気体性でとらえるのではなく、構造と形をもつ臓器の組み合わせの内部の固体性でとらえる新しい方向が切り開かれたことである。(Sawday, 1995) ヴェザリウスの前後の16世紀の解剖学は、画像と宗教と自己と世界の把握など、世界の根本と深くかかわっていた現象であった。

この知識をどのように伝えるかも重要な研究主題である。解剖した死体そのものは腐敗してしまう。それを乗り越える一つの技術的な改善が、ヴェザリウスのように精確な図譜を添えることであり、そのような正確な描写が可能な絵画職人が増加した。あるいは、同じ書籍であっても、特別な工夫をこらしたのも現れた。その中では、17世紀の初頭にドイツかフレンギングの地域で刊行された『人間の生命の四つの季節』と呼ばれている4枚のイラストを一組みにした作品が著名である。(Horstmanshoff, 2002) 4枚のイラストは男性と女性が幼少期・青年期・成人期・老人期の4つの段階を描き、それぞれが詳細な解剖学の重ね図から作られている。成人期の男女の腹部や胸部でいうと、外部の体表面の下に5枚以上の解剖図が重ねられ、それをめくっていくと、人体の構造が次々と示されていく図版が出てくる。成人期においては、男性器が勃起している状態や女性が妊娠している状態が描かれている。解剖された身体の画像が、非常に複雑な技巧とともに提供された事例である。

これが平面的な描画であるのに対して、現実の身体を立体的に保存して売買する方法も17世紀に現れていた。イギリスのロンドンでは、イタリアのパドヴァで作成され購入された標本が王立医師協会 (Royal College of Physicians) に6枚、王立外科協会 (Royal College of Surgeons) に4枚がそれぞれ存在している。¹ 王立医師協会の6枚はジョン・フィンチ (John Finch, 1626-82) という議員の父親を持つ人物がイタリアのパドヴァで買ったものである。外科医協会が現在は所有する4枚は、1640年代の中葉にイギリスからイタリアに行ったジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) が、パドヴァの医学校で解剖学の教授と助手から買い求めたものであり、イーヴリンの日記に比較的詳細な記録が残っている。それは、動脈、静脈、神経、肺や肝臓などを精巧に取り出し、腐敗する可能性がないようにして全身標本に仕上げたものである。実際に人体そのものを用いているのだから、その標本が180センチを超える人体と同じくらいの大きさであることは当然である。エジプトのミイラや日本の即身成仏などの保存された死体から膨らみを取り除き、かなりの程度まで平面に近い状態にして貼り付けた死体であると考えてもよいのかもしれない。この標本を用いて医学的な講演が17世紀の末から18世紀の初頭にロンドンで行われたが、この三次元的なマテリアルがどの程度有効であったのかはわからない。

二次元的な図像を重ねて身体の内部を表現すること。三次元的な実際の死体の標本で表現すること。これらの技術によって人体を表現することよりも、17世紀末から18世紀初頭のヨーロッパの技芸と技術の水準の中で最も優れていると考えられたのが、蠟細工による解剖標本の作製である。ボローニャ大学の解剖学教授でカエルの動物電気の実験で著名なルイージ・ガルヴァーニ

¹ 王立医師協会と王立外科医協会は、それぞれのウェブサイトには死体標本の説明とカタログを掲載している。王立医師協会は“The Anatomical Tables”, <https://www.rcplondon.ac.uk/news/anatomical-tables> で動画を見ることができる。王立外科医協会においては、以下のカタログで Anatomical Tables を検索することができる。 <http://surgicat.rcseng.ac.uk/> いずれも 28 Sept 2018 にアクセス済み。

(Luigi Galvani, 1737-1798)によると、死体になったとたん、生きている実物の身体が持つさまざまな特徴が破壊されてしまう。自然であり現実である身体の特徴がなくなり、空気に触れると乾燥して皺が寄り、もともとの形を失ってしまう。そして腐敗を食い止めて現実がわかるようにすることが難しい。一方で、蠟細工で死体を再現する技術は、高度な白色に生成した蠟を加工して、身体内部の骨格、筋肉、臓器、血管などのさまざまな色を生きている状態の事実の通りに表現することが重要であった。この技術の中心はイタリアであった。

この領域で著名な絵画や彫刻などに携わりながら解剖学の蠟細工を作り上げる高級職人はシチリア出身のギウリオン・ガエタノ・ズンボ (Giulion Gaetano Zumbo, 1655-1701)、ポローニャ出身のエルコーレ・レリ (Ercole Lelli, 1702-1776)、そしてクレメンテ・スシーニ (Clemente Susini 1754-1814) などが著名である。彼らはフィレンツェやポローニャで活躍して、蠟で人体解剖や疾病の模型と表象を作り上げている。

彼らの活躍は、当時のイタリアやヨーロッパにおける死と宗教の意義と深く結びついていた。たとえば、ズンボが作成した蠟モデルは、解剖標本だけでなく、ペストの惨状の再現も含まれている。フィレンツェで制作されたものは、もちろん丁寧な解剖標本の蠟細工もあったが、それと同時に、人間の身体がこの世界で病に倒れていくありさまも蠟人形で再現されていた。より具体的には、17世紀に最後のクライマックスに達していたペストの病者や死者たちが街や家で作り出す惨状を蠟模型で再生することである。絵画の伝統においては、フランスの画家のニコラ・プーサン (Nicolas Poussin. 1594-1665) や、イタリアのカルロ・コッポラ (Carlo Coppedola. ca. 1635-1672) などが描いた街角のペストの惨状が著名である。ズンボが蠟人形で描いたのは、『ペスト』La Pestlinza というタイトルである。1656年にナポリで起きた非常に大きなペストの流行であるのかもしれないし、別の都市や時期でのペストを描いたのかもしれない。85センチ×90センチ×45センチほどの箱状の作品に再現された、ペストのもとでの人々の苦しみと死を描いたものである。大人や子供や老人、乳児と母親たちが苦しむ蠟人形の重なり合い、死体はまだ白い状態のものもあれば、変色をはじめたもの、茶色のもの、どす黒いものなどがある。遠形には死者を積み重ねて野原で焼き尽くす光景も描かれている。あるいは『時の勝利』というタイトルの作品も同じくらいの大きさの箱で、そこでは人々が死んでいく地があり、死後さまざまな時間が経過したことが異なる色で表現され、すっかり腐敗しきった死体をむさぼるネズミなども描かれている。これらの作品には、「時は死をもたらし、神は永遠の呪いにより罰する」という観念が鮮明に描かれていた。1775年にサド侯爵はフィレンツェに行き、ズンボの作品を見て、死体が累々と重なる蠟細工に衝撃を受けた。死の翌日から長く経て虫が食い荒らしたものが集められたありさまは、無に帰するような動きであり、それと同時に、神の恩寵を感じさせる場面であったという。

宗教の問題と並んで、ジェンダーの問題も大きく前面に現れてきた。これは、ポローニャの女性であった解剖職人と蠟細工師のリーダーにおいて顕著である。パリの細工師で、フランス革命後にロンドンに移住して巨大な事業主となった女性においても同じである。

ポローニャでは、この解剖職人の作業をリードしてヨーロッパで圧倒的に著名となる女性職人が現れた。名前はアンナ・モランディ・マンツォリーニ (Anna Morandi Manzolini, 1714-1774) である。18世紀のポローニャの解剖職人として傑出した能力を発揮して、その活躍は、イタリ

アはもちろんスイス、フランス、ベルギーの知識人雑誌で優れた女性高級職人として称賛され、ヴェネツィア共和国、サルデーニャ、オーストリアのヨーゼフ2世、ロシアのエカチェリーナ2世なども、アンナに蠟細工の解剖作品の作成を依頼した。イタリア語圏での研究の蓄積もあるだろうが、私が知る範囲では、英語圏ではレベッカ・メッサバーガーの2000年代の研究と、ルチア・デイコムが2017年に刊行した著作が、非常に水準が高い研究である。(Messbarger, 2001; Messbarger, 2003; Messbarger, 2010; Dacome, 2017)

18世紀のポローニャにおけるアンナ・モランディの出身は不明である。本人もポローニャの慈善による職業教育の対象であったし、彼女が残した作業の膨大なノートを見ても、幼少のころから識字を持っていた筆跡には見えにくい。ポローニャの解剖職人であるジョヴァンニ・マンツォリーニと1740年に結婚した。アンナは夫のジョヴァンニから解剖職人の技法を学び、その技法が最初は苦手であったが、急速にマスターした。夫の1755年の死後は、息子二人を指導しながらヨーロッパでも著名な解剖職人となった。この成功の一つのカギは、デイコムの説明が非常に説得力がある。それは、彼女が解剖職人術を家庭で学んだことである。最初は夫から学ぶという方法を取り、1755年に夫の死後は彼女が息子に教える方法をとった。ある意味で家庭の安定の一つの技法が、解剖職人業の洗練であった。また、彼女が解剖職人として解剖を行い、それを蠟細工で再現する手つきは、針仕事や縫物の女性らしい行動であった。多くの人がその〈女性らしい〉解剖職人の手つきをたたえているし、彼女自身も、針仕事や縫物の手さばきと指さばきが暗示された解剖する蠟細工を自ら作り出している。

蠟細工を用いて巨大なシナリオを描くのは、18世紀末のマリー・タッソー、のちに「マダム・タッソー」として知られるフランスの蠟細工職人である。マリーが蠟細工職人の技能を学んだのは、フィリップ・クルティウス (Philip Curtius, 1737-1794) というスイスの医師であり蠟細工の技能をマスターした人物からである。後者の技能が高く評価されてパリに移住して、蠟細工師として王や貴族に高く評価された。クルティウスと同居した女性がアナ・マリー・グロショルツであり、彼女の娘が後に「マダム・タッソー」と名乗るマリー・グロショルツであった。マリーは、クルティウスから蠟細工を学んで、最初は果物などを、そのうち人体の皮膚の表現などに卓越するようになった。その技法を用いて、クルティウスが成功させたパリの街で王や女王の蠟人形などが展示されている見世物にも貢献し、ヴェルサイユ宮殿で宮廷の一員に蠟細工を教えて成功していた。フランス革命が進行すると、ルイ16世、マリー・アントワネット、ロベスピエール、マラーなどの処刑された人々の頭部を蠟細工で再現するようにもなっていった。1795年にクルティウスが没して、王党派や共和派の頭部の蠟人形のコレクションを引き継ぐことになり、その秋にフランソワ・タッソーという機械職人と結婚した。夫のフランソワが蠟人形にはかかわることはなかった。子供を得たのちに、ロンドンに移住して蠟人形展を開催する。ロンドンでは18世紀の初頭から蠟人形展は発展しており、動物、植物、鉱物だけでなく、男性・女性の性器や病的な標本も展示されていた。マダム・タッソーは、1805年にはロンドンで、その後にはスコットランドまで蠟人形を展示した。男性に限定されていたが、フランス革命の処刑者たちの蠟人形も公開されているものであった。この事件も、ジェンダー論と大衆娯楽と密接に関連した蠟人形作成の職業である。

このように概観すると、イタリア、フランス、イギリスといったドイツ以外のヨーロッパにおける蠟細工の技法について、大きなダイナミズムに満ちていることがわかる。古代・中世からの蠟の実務上の利用や宗教的な利用と並行して、17世紀になると医学と密接に結びつくようになる。ことに大きな前進をした解剖学で蠟は特に重要な役割を果たして、医学教育において人体の内部、臓器、骨格、筋肉などを表象することに大きな貢献をした。それと同時に、18世紀から19世紀にかけて、宗教、ジェンダー、政治や革命という現象と深く結びついて発展したことも分かるだろう。石原の書物がドイツのムラージュと日本での発展が重要であることを論じることには賛成する。しかし、他の地域で蠟を用いた医学教育に利用されたこと、そして多様な社会・文化・政治などと重要にからみあったこと、これらも重要な現象である。石原の著作は、ドイツと日本に限定されたムラージュの医学史を取り上げた優れた研究である。ことに、自然科学の他の領域におけるムラージュの技法の探求は、非常に鋭い新しい視点であった。しかし、蠟人形や蠟細工の研究に関しては、ドイツと日本以外でも活発に進行していることを指摘した。このような興味深い流れを思い起こす優れた研究書であった。

研究文献

- Berridge, Kate. 2007. *Waxing Mythical: The Life and Legend of Madame Tussaud*. John Murray.
- Horstmanshoff, H. F. J. and Trent Collection. 2002. *The Four Seasons of Human Life: Four Anonymous Engravings from the Trent Collection*. Erasmus Pub. The Four Seasons of Human Life.
<https://library.duke.edu/media/flash/fourseasons/> Access 28 Sept 2018.
- Dacome, Lucia. 2017. *Malleable Anatomies: Models, Makers, and Material Culture in Eighteenth-Century Italy*. Oxford University Press.
- Düring, Monika. 1999. *Encyclopaedia Anatomica: A Complete Collection of Anatomical Waxes*. Taschen, 1999.
- Jordanova, L. J. 1989. *Sexual Visions: Images of Gender in Science and Medicine between the Eighteenth and Twentieth Centuries*. Harvester Wheatsheaf.
- Kemp, Martin and Marina Wallace. 2000. *Spectacular Bodies: The Art and Science of the Human Body from Leonardo to Now*. Hayward Gallery.
- Lightbown, R. W. 1964. "Gaetano Giulio Zumbo - I: The Florentine Period." *Burlington Magazine*, vol. 106, no. 740: 486-496.
- Lightbown, R. W. 1964. "Gaetano Giulio Zumbo - II : Genoa and France." *Burlington Magazine*, vol. 106, no. 741: 563-569.
- Messbarger, Rebecca. 2001. "Waxing Poetic: Anna Morandi Manzolini's Anatomical Sculptures." *Configurations*, vol. 9, no. 1: 65-97.
- Messbarger, Rebecca. 2003. "Re-Membering a Body of Work: Anatomist and Anatomical Designer Anna Morandi Manzolini." *Studies in Eighteenth-Century Culture*, vol. 32: 123-154.
- Messbarger, Rebecca. 2010. *The Lady Anatomist: The Life and Work of Anna Morandi Manzolini*. University of Chicago Press.
- Sawday, Jonathan. 1995. *The Body Emblazoned: Dissection and the Human Body in Renaissance Culture*. Routledge.
- Warner, Marina. 2006. *Phantasmagoria: Spirit Visions, Metaphors, and Media into the Twenty-First Century*. Oxford University Press.